

ひまわりの絵はがき

佐藤 陽真里

「おはよう！」

今日も事故やげがをせず、元気に登校することができた。それは、曾祖母の三枚の絵はがきのおかげだと思ふ。

夏休みになると、毎年母の実家がある田舎で大半を過ごす。実家に到着する手前で、まず一番最初に曾祖母に会いに行く。「ただいま、ばあちゃん。帰ってきたよ。」私が生まれたばかりのころ、曾祖母は母と一緒にミルクをつくってくれ、よく歌を歌ってあやしてくれていたらしく、小さい時からずっと大好きな人だ。

ある日、曾祖母が母の実家まで歩いて来た。曾祖母は、少し息切れしながら私に二枚の絵はがきを手渡してくれた。そのはがきには、曾祖母が描いた花びんに入ったお花の絵が描いてあった。私は、その絵がすぐに気に入った。そして、もう一枚「何か絵をかいて」と、曾祖母に紙を渡した。色えん筆をにぎると、「陽真里だからひまわり。」と言ってかわいらしいひまわりの絵を描いてくれた。母の実家と曾祖母の家の間には長い坂があり、息切れして来て

いたことを思い出し、「ばあちゃん、送るよ。」と言って、右うでは私が、左うでは弟が転ばないように両うでを支えて、気をつけながら、ゆっくりと二人で横に並んで送っていった。曾祖母は、「私はなんて幸せなんだろう。こんなに優しいひ孫がいて。ありがとうね。」と言って、ニコツと笑ってくれた。そのありがとうねの言葉はとてもあたたかくて、ありがとうという言葉がこんなにも心にしみたのは初めてだった。

この時からその絵はがきは、私のランドセルのポケットにお守りとしてしまつてある。そのお守りの効果はとても良くて、毎日元気に登校して友達に会うことができる。ランドセルを開けるたびに「ありがとうね。」と心でつぶやく。

そして今年もまた、夏休みがやつてきた。楽しみにしていた田舎へ行く。

「ただいま、ばあちゃん。帰つてきたよ。」

いつもの夏休みとはちがう。今年はニコツとしてゐる曾祖母の写真に向かい話しかける。

「あらまあ、よく来たね。つかれたでしょ。」
と話しかけてきそうだ。

「ばあちゃん、いつもありがとうね。」

そう言つてお仏壇の前で手を合わせる。家の中には、線香の香りがした。